

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 西岡和彦・石本道明・青木洋司著
江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土田, 健次郎, Tsuchida, Kenjiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000156

〔書評〕

西岡和彦、石本道明、青木洋司著

江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究

土田健次郎

江戸時代が啓蒙の時代となった理由については社会構造の变化や版本の一般化などの影響があげられてきたが、この時期東アジア全体で権威を持っていた朱子学における幼少年教育の重視、また朱子学に限らず儒学自体が基礎教養となったことも見逃せない。本書は江戸時代の啓蒙の中でも特に『論語』の訓蒙書資料的をしぼって、そこに編著者の確かな見識が感じられる。『論語』を柱にすることにより様々な事象が系統的に現れてくるからである。『論語』はその文章と内容の平明さから中国でも童蒙の課本として使用されたりもし、日本でも素読の定番であり幼少から無学者にまで及ぶ広い読者層を持った。儒学各学派の差をこえた共通の経書であったことも重要である。本書は『論語』訓蒙書の基礎的研究としての道標として多

大な意義を持つ。以下、本書の構成に沿って内容を概観したい。

序章は、まず石本道明「江戸期『論語』 訓蒙書概念及び分類と対象と」で、訓蒙書の規定が考察される。もともと中国では訓蒙書は大別して、童蒙向きと、蒙昧な成人向きの両方があり、前者はその先に科挙受験が控えていた。しかし科挙の入らなかった日本ではその軸が無く、改めて訓蒙がどのような需要のものになされたかを押さえておく必要があるが、本論文はそれに応えている。続く西岡和彦「崎門と訓蒙書」は山崎闇斎学派（崎門）の講義録、筆記録の概観である。これらは著者も言うように闇斎学派内部の学習を対象とし多く写本で伝わり、不特定の一般読者を対象とした訓蒙書とは異なるが、この学派の各層への浸透とその命脈を長からしめた一大資料群である。

次の青木洋司「江戸初期『論語』訓蒙書と明代の学術——『論語集註抄』を中心として——」は林羅山のもとと伝える『論語集註抄』を例として江戸時代の訓蒙書には明代の学術の受容が大きく働いていたことを述べる。この『論語集註抄』は第一章でも項目が立てられている。続く大貫大樹「江戸期『論語』訓蒙書年表稿並解説（天正十一年から元禄元年）」は、江戸時代初期の『論語』訓蒙書の概観と年表である。

第一章は、各論で、本書の中核であり、合計二十二の文献が

対象である。青木洋司、石本道明、西岡和彦、大貫大樹、木村剛大、柴崎一孝、今瀬英一朗各氏による文献の解題には『書名』、『書誌』、『先行研究』、『撰者』、『特徴』という共通項目が立てられ、更に『余説』が付されているものもある。各文献につけられている数枚の書影によって、文字情報だけでなく視覚的にも書物の雰囲気がかかるのがある。そのうち七篇については青木、石本、大貫、柴崎各氏の論文が付せられ、読み応えがある。各論文及び解題には貴重な情報や指摘もあるが、紙数の関係で逐一触れないのが残念である。

ここで取り上げられている文献には、朱子学系のもの、それ以外の学派のもの、学派色の薄いものがある。またむしろ参考書と言った方が適当なものもある。例えば那波活所『重編四書註者考』などがそれで、『四書大全』に載せる百二十三人の伝と、伝が不明の二十五名の目録である。なお該書は漢文の著作であるがゆえに児童には難解であるとして和文によって書かれた竹谷山人『通俗四書註者考』もあげられている。その他大原武清『四書引蒙略図解』、古市南軒『經典読法早指南』、『改正四書字引』などによって工夫を凝らした初学者用の書が各種刊行されていた様相が知られる。和田静観窩『論語序説諺解』は朱熹が『論語集注』の冒頭に置いた『史記』孔子世家をアレンジした孔子

一代記「論語序説」に対する啓蒙書であるが、異説への言及もあり、同じく「論語序説」の啓蒙書では小出永安『論語序説仮名抄』も紹介されている。なお崎門の仮名講義群の代表としては浅見綱斎『論語師説』が、参考書では山崎闇斎『論語序考』、佐藤直方『論語便講』があげられている。

本書で取り上げられた書物の中で名が知られているのは、『漢籍国字解全書』にも収められた中村惕斎『論語示蒙句解』であろう。『論語集注』に沿った和文の『論語』注釈だが、朱熹の注の理解の水準は高く、それは毛利貞斎『重改論語集註俚諺鈔』にも言えることである。他に朱子学系統では安部井帽山『四書訓蒙輯疏』もあげられているが、これは書名に反して必ずしも初学者向けではない。更に正文のみに『論語集注』に沿った読みを全面的に付した『論語』（傍訓本）も載せられていて、漢籍で同種のものが多数あることが指摘されているが、国学でも原文全文に本居宣長の訓を付した『古訓古事記』なども刊行されていた。総じて振り仮名、送り仮名、和文著作というようにに仮名を有効に利用していて、これが日本の啓蒙力を東アジアの中で突出するものに押し上げていたことが改めて痛感される。

以上は朱子学系統であるが、その他の学派では、中根鳳河『論語徴微』が荻生徂徠の『論語徴』の語句の出典をあげ、『拾遺』

も合冊されている。但徠は訓点を批判したが、この書では出典には訓点をほどこし、訓蒙の配慮が示されている。なお幕末の弘前藩は藩校の稽古館を創設した当初は但徠学を奉じたが、そのテキストは難読の『論語徴』ではなく、但徠の弟子の太宰春台の注釈であったのは(二〇二一年十一月二十一日「旧弘前藩校稽古館資料調査報告会」(弘前大学)における植木久行報告「弘前藩校稽古館の蔵書―蔵書目録と古典調査を踏まえて―」、『論語徴』が初級者相手には使い勝手が悪かったのも一因であろうか。春台は音読を最善としながらも、その学習が容易でない人のために『倭読要領』を書いたりした。本書では春台の義子である太宰定保の『論語古訓正文片仮名附』も見え、そこでは先の『論語』(傍訓本)のように経文の正文のみ取り上げ、春台の『論語古訓』の読みに従い全文に仮名を付している。ちなみに伊藤仁斎の学派でも仁斎の『論語古義』に対する和文の解説書の『古義抄翼』の刊行が企画されるなど(拙稿「伊藤東涯の『論語古義』講義―古義学の基本的性格―」、『新しい漢字漢文教育』七三、二〇二二)、各学派でもそれぞれの立場からの啓蒙が試みられ、今後は写本も含めこれらの渉猟も期待される。また何晏の『論語集解』に対するものでは皇侃の『義疏』を援用したという宇野東山『論語集解国字辯』があげられ、同じ著者

の『四書国字辯』も見える。前者は新注も引くが古注が主で、後者は新注に沿っているらしい。さて続いては『論語余師』であるが、これは『論語集注』によりながら、時に朱熹の本説以外も取り込むことがあるという(青木洋司氏の解題)。この書をはじめ『經典余師』シリーズは仮名さえ読めれば漢籍が一通り理解できる優れた自習書で、当時からよく売れ、近年も復刻が出ている。本書では『經典余師 四書序之部』も載せている。

第二章は、中山ひかり氏担当の先行研究目録、第三章は、同氏担当の文献目録である。後者は「所蔵先略称等一覧」、続いて研究対象文献の目録(書名、著者名、巻冊数、版本と写本の別、著者の生没年、所蔵箇所、備考を具える、年代順)、更に「選者別刊行物一覧」(五十音順)からなり便利である。

附篇として、篠原泰彦「ウェッブサイトにおける版本公開について」があり、本研究専用ウェブサイト(<http://kumnu.310>)が紹介されていて、既にそのサイトには『論語余師』など数点の書誌と本文がアップされている。最後に人名、書名索引を付す。

折衷学の井上金峨は『匡正録』で、訓読批判を展開した但徠の影響で訓蒙書を軽んずる風潮が広がったが、五十年たった今はその門人も遺著に仮名を付し、「比年以來、東西の書肆、歳

ごとに国字の註解を刻し、指数に暇あらず。一に学者に裨する無く、良に慨嘆す可し」と訓蒙書が毎年のように刊行され活況を呈していると嘆いた。訓蒙書は確実に需要を増していたとともに、軽視されてもいたのである。今でも訓蒙書というと教育の普及とか文化の浸透とかいうことだけで評価されがちだが、学問的にも侮れるようなものではない。それは評者（土田）が『論語集注』の全訳注を作成した時痛感したことである（『漢籍啓蒙の伝統の継承』、『日本中国学会便り』二〇一七年第二号、学会ホームページから閲覧可能）。南宋から明にかけて『論語集注』の注釈書はかなり作られ、『通志堂経解』などに収められているが、これらのいわゆる末疏の類やそれを受けて出現する明代の『大全』の類は、思想理解には多少資することがあっても、『論語集注』そのものの訳注作成にはあまり役に立たないのが実感である。この類を見るくらいなら朱熹自身の文献の關係箇所を精査検討するに如くはない。かくて『重改論語集注 但諺鈔』に引かれている明代の文献などについて評者は関心をそそれなかつたのであるが、本書で青木洋司氏はこの書の構成や内容を詳しく分析し、特に朱子学の範囲に止まらず明代四書学の便覧的意味を持っていること、わけても『鼈頭大全』に多くを負っていることを指摘しているのは参考になった。江戸

時代における明代文化の受容は常識化されているが、一方で古学における古代復帰、崎門における朱熹自身への回帰という運動もあり、また評者が以前から注意しているように受容も年代順になされてはいるわけではない（拙著『江戸の朱子学』（筑摩書房、二〇一四）。「論語」訓蒙書に即した着実な研究は、明代文化の受容の具体相の解明にも資するであろう。

本書をめくりながら、改めて江戸時代の訓蒙書の質の高さを感じた。漢籍原文を読むための啓蒙書の出版が低調な今こそ、この伝統を継承する必要がある。本書の刊行が、この領域に対する関心と研究の深まりにつながることを期待したい。

（B5変判、四二〇頁、明德出版社、二〇二一年十二月、定価一〇〇〇〇円＋税）